

# 大学入試制度改革に対する大学 - 高校の協力

長谷部 清

北海道大学大学院地球環境科学研究科

## University Entrance Examination and University-High School Collaboration Today and Tomorrow

Kiyoshi Hasebe

Hokkaido University

*Abstract* This article outlines the history and future of Hokkaido University's admissions system, with special attention the changing profiles of national university entrance examination scores, the academic abilities of entering students and changes in the university admissions policies. As the number of candidates for admission (i.e., the population of 18 year olds) is expected to decrease substantially in the near future, it is crucial for universities to discuss enrollment issues. Changing the current admissions system is one way of dealing with this problem. One way in which this is happening is through collaboration of the university with regional high schools. Hokkaido University cooperates with senior high schools and private preparatory schools in Hokkaido Prefecture by providing information about the profile of entrance examination scores of incoming students.

### 1. はじめに

大学入学者選抜制度に共通第一次学力試験が課せられるようになったのは、昭和54年度からである。平成元年まで続く共通第1次学力試験(以下1次試験という)は国公立大学で実施され、基本的考えとして、(1)1次試験によって、入学志願者の高等学校段階における一般的、基礎的な学習の達成度を客観的に評価する。(2)第2次学力試験は各大学が独自に実施するもの(以下個別試験という)によって、志願者の志望する大学、学部、学科の目的、特色、それぞれの分野に応じて重視される能力、資質、適性等を評価する。個別試験では、学力試験のほかに小論文、実技、面接および調査書などによって多角的、総合的に合否

を判定しようとした。1次試験は大学入試の改善の切り札とはならず、俗に言う偏差値教育を助長することになり、結果として受験生の塾通いや受験産業の拡大をもたらす結果となった。善後策として昭和62年度から国公立大学の複数受験機会の導入、昭和63年度からA・B両日程の連続方式による(国公立大学の)グループ分けの実施、平成元年から分離・分割方式の導入、平成2年度から1次試験を大学入試センター試験(以後センター試験という)の実施へと変更された。これを契機にセンター試験に私立大学も参加できることとなり、今日に至っている。また、平成6年度に導入された新しい高等学校学習指導要領に基づき科目が5教科18科目から6教科34科目になり、選択の幅が一挙に広がることとなる。その試験の

元年が平成9年1月である。このことに寄せる期待は、入試の多様化が一層促進されることとなり、俗にいう“偏差値”の割り出しが困難になることであろう。この結果、各大学の個別試験(2次試験)との組み合わせによって大学入試は、益々個性化および多様化が促進されることが期待される。一方、大学における入学者選抜の特色ある多様化は、入試に携わる関係者に多くの負担を強いる結果となっているのも事実である。平成5年、大学審議会より、特色ある多様な入学者選抜の実現が答申され、帰国子女や社会人を積極的に受け入れる特別選抜を導入し、推進することが求められている。本学においても、小論文試験、推薦入試および面接など多様な入学者選抜を進めるだけでなく、その善し悪しを反省し、今後に向けた多様な入試方法を検討課題とすべきであろう。

## 2. 本学受験者の姿

過去10年の受験者の推移について眺めてみると、すでに述べた大学入試方法の変更はあったものの受験生の負担増を考慮して、大幅な受験制度の変更は基本的に行われず、軽微なものにとどめられてきた。2次試験(個別試験)は記述試験を基本とするために、採点、受験会場などとの関係から受験可能者数は入学定員の3.5~4倍にとどめられている。入学志願者は地元北海道は言うにおよばず南は沖縄県まで全国にわたる状況にある。昭和54年(1979)の1次試験から平成2年の入試センター試験の16年間[平成6年(1994)まで]における受験者(5教科6科目型)の成績は上位およそ3分の1以内にあり、教育する側からすればどの受験者が入学しても指導しやすい集団であり、均質のとれた学習集団(画一的集団)と言えよう。

## 3. 本学における高校・受験生へのサービス

本学における父母・進学希望者に対するサービスとしては、百年記念会館内に大学入試センターによる全国大学(入試)情報を提供する進学情報サービス室が開設され、全国の大学入試に関する種々の情報を提供している。多少の難点は休祭日に利用できないことであるが、受験者や父母に結構利用されている。また、大学入試センターが展開するガイダンスセミナーや広報セミナー等の情報およびセンター試験の変更点や事項は、本学からも関係者がセミナーや会に参加し、そこでの情報・事項は入学者選抜制度調査委員会に諮られ、本学入試制度の整合性が整理・調整され、上部の決定機関で承認を受けた後、実施に移されることとなる。これらの決定事項は、本学入学者選抜要項および学生募集要項に掲載され、高校および受験者に周知公表される。このようなサービスは全国立大学で実施していることである。一方、受験産業である民間企業が企画する“道内国立4大学入試説明会”や“東北・北海道大学入試懇談会”が高校進路指導部の先生方を集めて年に1度程度開催されている。“道内国立4大学入試説明会”には、各大学から教官および(あるいは)事務官が参加してその年度の入試制度の変更点、諸注意事項を解説し、進路指導部の先生方の質疑に対応している。“東北・北海道大学入試懇談会”では先生のほか、父母や受験生も参加でき、受験者にとって一度に大学入試に関する多くの最新情報が入手できるので好評である。本学独自のこのような広報活動は実施されていないと思われる。積極的な広報活動を展開することを一考する時代も間近に迫っているように思われる。

## 4. これからの問題

社会的に高齢化が進む中で、大学受験人口の激減は目を見張るものがある。その変化の様子を図1に示す。図1からも明らかなように平成15年には最大数の時の約半分になる。このことを視野に入れ、さきを見越した大学入学者の確保ための

図1 18才人口・高卒者 &amp; 大学・短大受験者数の推移(旺文社の許可のもとに転載)

方策はそれぞれの大学において既に取り組みようとしている。とりわけ、私立大学にあっては顕著である。校舎の改築、郊外への移転による広大なキャンパス造成、福利厚生施設の充実、寄付講座の開設、寄付による奨学金、奨励金の強化など様々な取り組みである。

多様な入試の取り組みの結果として、昼間コースと夜間主コースの相互乗り入れによる取得単位充足などの便宜を図っている大学や新潟大学工学部に見られる補修授業の開講など新たな対応にせまられている実状もある。多様な入試の展開により、学力、能力、適性や個性に富んだ入学者が在学することになり、その場合、大学としてどんな対応がそれらの入学者になしうるかが問われることになろう。入学させた後の学生への種々の気配り・配慮が重要となるであろう。

## 5. 21世紀にむけて

20世紀には、化学はどこまでも純粋な系を求めて研究がなされてきた。抽出、溶融、沸点蒸留など方法を駆使して、徹底した純物質を追い求めてきた。そしてそのスペクトルから同定し続けてきたのである。しかしながら、これからは純粋なケイ素に僅かな不純物としてホウ素やリンの添加が電導性を持つ半導体となるように、このような僅かの異物の存在が性質を大きく変えてその有用性が高まるように、その存在が重要な因子となる。

これまで大学も如何にして純粋な人を世の中に送り出せるか、に努力してきたように思われる。これからは、どの程度均質化の中での個性を尊重した入試と入学後の教育・研究における大学側の気

配り・配慮が構築できるかが重要になると考えられる。

21世紀に向けた取り組みのひとつを紹介しよう。高知医科大学では、医師を目指す志願者を県内にとどめるために入試検討委員会の教官、学生部長および事務官などを加えた組織で県内の高校をくまなく訪問し、受験者の獲得を目指しているとのことである。受験生の県外への流出は、県内の医師としての確保が難しくなること、卒業後、就職して県外に出られて医療業務に支障を来す恐れがあるというのである。一方、受験者数の減少は大学の存亡にも係わることにもなりかねないのである。

まもなくすべての大学進学希望者が大学生になれる時代が来ようとしている。本学が“大学の大量化”を進める中で、どのようなタイプの学生の入学を本学は欲するか、どのような特性、資質を持つ学生が入学することを望むか。大学・学部の

おかれた立場によって異なるであろう。

新しい時代に即応した人材・知識人の育成のために、基幹大学・大学院大学として創造性、独創性ある次世代を担う学生をどのように確保するか、資質ある進学希望者をどれだけ獲得できるか。大学はどのような方策を進学希望者に提供できるか。大学はそれぞれ生き残りを賭けて新たな挑戦を展開することになるであろう。クラーク先生の建学の精神と伝統を受け継ぎながら、次世代をどう展開するか重要な時である。

## 6. おわりに

大学と高校の間で、何が協力できるか。高校あつての大学である。両者の十分な連携の元に意欲あふれる若人で大学構内が活気ある状況を作り出すにはどうすればよいか。まずは、“隗より始めよ”と先達は申しておられる。